

解 答

一 問1 準備 b 宇宙 c 勤め d 発揮 e 新種

問2 「猫に見える世界」は、自分の体験したことや自分に直接関わることからで構築されており、自分の感情に働きかけてこない情報は排除されている。「自分が見ている世界」は、実際に自分が体験し、実感を伴うことがらと、ただ情報として持っているだけなのに知っていると錯覚しているものとが混在している。

問3 自分はイラクで毎日人が死んでいることをメディアを通じて知ってはいるが、情報として受け取っているだけで、現実に起きていることとしての実感を伴っているわけでもなく、そのことについて深く考えているわけでもない。情報を持つがゆえに知っていると錯覚しているだけで、それは本当に知っていることにはならないと自戒しているから。

問4 映像の記録など過去を証明する証拠が残れば残るほど、それに甘えて人は記憶する努力を怠ることになる。たとえ事実どおりでないにせよ、自分で感覚を働かせて記憶した映像の鮮明さは、記録とは比べものにならない。記録はそうした記憶を描き出す心の自由を制限し、人は、何十年も色褪せない記憶を持ちにくくなつた。このことは、人間が生きていく上で大きな支えを失うことにはかならず、それを筆者は辛さととらえたのである。

問5 情報や記録がたくさんあることで、人間は自分の感覚を働かせてものごとを見たり記憶したりすることを怠るようになってきた。情報や記録は、人間が本来持つ感覚をぶらせかねないことを認識し、これらに埋もれて、生きる支えを失わないようにしたいものだと考えている。

二 問1 時間

問2 おじいちゃんは、身近な人を次々と亡くし、生きている理由がわからなくなつたと言つた。それは、まさにこの二年間、自分が考え、悩んできたこととおなじであり、おじいちゃんにおなじ痛みを持つ者として共感を覚えるとともに、いたわる気持ちになったから。

問3 A 「死んでもおわらないってどういうこと？」
B 「ほんとうにそのとおりだね、おじいちゃん」

問4 自分がいつ死ぬか、死んでどうなるかは誰にもわからないが、そのおかげで恐怖を感じることなく前向きに生きることができる。いつか死ぬからと、生きる意味を見失うのではなく、むしろそうだからこそ、自分が命を与えられ、生かされていることに感謝し、毎日を楽しく悔いのないように精一杯生きるべきだ。それが人間のつとめだろう。そのように生きる中で、人は知らず知らずのうちに何らかの役割を果たしているのだと考えている。